# こどもが自分を見出す時

――「神」への教育につきフレーベルにきく――

齋藤善太郎

まへの稿を：それなりには「此のこゝろもちを分りあひたい」といふ心でゞはあつたにしても―其れを書きつゞけてゐながらも、「僭越なことである」、「よし古典の心を溫めるつもりにしても、自分でなしえてはゐぬこと、その意味で知りもせぬことをこやかくとあげつらうて」と思はれ〳〵して、あひすまない氣をよく感じさせられてゐました。そして殊に、私事ながら、活ける宗教々育を、言には出でぬながら寂かにしかし烈々となしつゝある方の眼にふれることをも知つてゐたので、「僭越である、うちきらう」と思はせられてゐたのでした。とはいふものゝしめくゝりもせずに消えたのではこれもすまぬしとずるゝになつてましたが、たま〳〵見つゝあるフレーベルの「人間の教育」のながい、いくら讀みかへしてもいゝ節、いな、ほんとうな意味で「古きを溫め」ねばならぬ箇所がありましたから、そこを互ひに讀みあふこゝろで數節拔いて、原意はかうもあらうかと察しあつてみることにします、そしてさうすることによつて、不束なりし稿を了らせてもらふことにします。

## 一

原書レクラム版の五二頁の下になりますが、そこに、

「こどもの最初のほゝえみといふものは極めて意味深い時期であつて、こどもの生活にとつて一つの劃期的な發達階段で

ある、それはこどもが初めて自分といふものを見出したしるしである、そして此のところに、その根をたどつてゆくと、こどもの自分と、こどもをとりまく社會しかも大きく高い意味での其れとの係はりにほりさげて行くことになる當の其のものが、あらはれてゐるのである。」

といふ意味のことが記されてあります。そして其れにつゞけて節をあらたにして五三頁のところから、

「此の一つであるといふこゝろもち、お母さんもお父さんもそして兄弟達もみんな自分と一つなんだといふ感じ、こどものかういふ共同感情、これが宗教心の芽である。」

ほゞかういふことを述べながらいろ〳〵に説明してゐます。そのときまづ注意すべきは、「眞の宗教心」もしくは「眞に宗教的にあること」といつてからそれを

『永遠なるもの、神と、はゞまるゝことなき合一に達せんとする眞の努力』

と言ひ換へてゐることであります。譯出しますと逆になりますが、原文の順序では、『すべての眞の宗教心、すべての眞の努力……』といふ言葉の竝びになつてゐまして、しば〳〵眞のではないむしろ僞の若しくは末の末なる、いはゆる宗教に私達の迷ひ入り乃至は反撥を感じやすくなることから私達を救つて、行くべき所へ私達を眞直ぐに連れていつてくれます。此の續稿の最初のあたりに引いて、宗教とは宇宙と一つにならうとすることであるといふ意味のシュライエルマッヘルの言葉をおしらせしたのも、かういふこゝろであつたのであります。フレーベルのいふ意味の宗教とは如何なるものか、それと生活との關係は如何になつてゐるかを此の言ひ換への一句はよく示してゝくれるのでありますが、さらにさきの「共同感情」の説明のところにも、そのことを更に深く解せしめてくれるものがあります。すなはち、

「一つであるといふ此の最初の共同感情、これはまづはじめにこどもを父母兄弟姉妹と一つにならしむるものであり、そ

の根柢にはより高き精神的合一がよこたはつてゐるものである。」

と、みんな一つである、一體である、より大いなるより深くより高き一全體の中に在つて互に一つである、共同共通である、といふことを說明してから、

「此の合一に結びついて、それのうへに、やがて確乎たる認知ができて、父も母も兄弟姉妹も人々もみんな、もつと高いあのもの、人の人たる所以のもの、神、と共通共同であり、一體であることを感じるやうになり認識するやうになるのである。」

と云つてゐます。此の本、すなはち「人間の教育」の有名な開卷第一のあたりと照應して、宗教乃至宗教々育に關して私達を眞直ぐにしかも足元深くつれていつてくれます。

こゝいらでも、少し立ち入りすぎるかもしれませんが、父、母、兄弟姉妹、人々、みな神と共同一體であるといふことを云はうとして、その『神』といふ言葉を出すまでに、ひとつの「より高きもの」、すなはちあの「人の人たる所以のもの」、すなはち「神」、

といふ風にして、しだい〳〵に高く深く、いはゞ足を宙には浮かさずにむしろ現實に十分卽せしめながらしかも高まるべきところまで高め、深まるべきところまで深めさしてくれる此の用意—宗教々育に關してあまりにも迷路の多すぎる今よりすれば殊に其の用意の實に用意たる所以を感ぜしめらるゝもの—も、感謝しつゝ味はつておきたいと思ひます。

## 二

まへの所は宗教のことを述べるための所といふよりか、こどもが自分自身をしたがつて社會をいはゞ見出すことについて述べながら、いつのまにかと云はうか必然にと云はうか、はなしは當然宗教々育のことにふれてきたのでしたが、それ

であるからして、さきのことを述べてゐた節はなほ次のやうにしてすゝめられてゐます。すなはちこのやうにして

「こどものかゝる共同感情は眞の宗教心の芽、尖端であるから、」

眞の宗教、生きてゐる宗教、危險にさらされ鬪爭のなかをぬけ、重壓のもとにも困苦のなかにも、快樂のうちにあれ歡喜のうちにあれ、如何なる時如何なる所に處しても凛然自ら立ち得るが如き宗教、かゝる宗教は、なほ乳呑み子たるときより人間に來るべきものである。

さういつて、宗教々育は、それはまことの教育そのものにほかならないから、人間への、人間としての、人の教育のそも〳〵の初めから在らねばならぬことを强調してゐます。そして附け加へて

「といふのは、有限のうちに人間としてかく實存するにいたれる此の現はれ出でたる神的なるもの、すなはち、人は、神的なるもの卽ち神よりして現はれ出でたるものなることを、ほのかなる豫感としてではあるが、はやくより氣づいてゐるものである。そしてこのほのかなる豫感は、それはなほきはめてぼんやりしたものではあるが、はやくより養ひ育て、强めやがて意識として高め、明らかなるものとしなければならぬからである。」

と云つてゐます。

そしてつゞけて、銘をあらたにして、

「母がまごろむこどもをかきいだきながら、こゝろしづかに、此の子のそしてまた自分の父であるいとたかきものに、したしげなるまなざしをむけ、其のあたゝかき御守りと慈しみふかき御計らひとを仰ぎ求めながら、柔かく安らかなる寢床へとこどもをよこたへるさまは、おもふに、眼には見えぬながら靜かに見守りたまふものにとつて悅ばしくも心うたるゝさまなるはもとより、こどもそのものにとつても、そは永遠なる救ひと祝福とをきたらしむるものである。」

と云ひ、さらにつゞけてしかし節をあらたにして、

「靜かに歡ばしげにほゝえみながらめざめたる子を、かくも安らかにしかもいやましに强くしてまためざめしめたまへる大いなる父に靜かなる悅びの感謝を仰ぎおくりながら、いはゞ今新たに大いなる御手より賜はりしものゝごとくに、おのづからもるゝ感謝のことばに動く脣もて、寢床より母がとりあぐるならば、こは、まさに心うたるゝげにも悅ばしきことなるはもとより、こどもにとつて今も將來もその生活のため極めて意味深く、祝福に充てることである。いな、子と母とのあひだの今後の深き生ける係はりにとつて、最も喜ばしき影響をあたふるものである。

と云つてゐます。大意をごく自由にとりながらぬき〳〵してゐるのでありますが、原筆者はさだめし高鳴る心をもつて書きすゝんでゐたであらうと、原文の文脈の進みかた、言葉づかひのあひだから來るものに、感じさせられます。

## 三

自分自身をこどもが見出す、したがつて社會、大いなる社會のうちにおいてあることをこどもは感じる、さういふことにフレーベルはふれながら宗教々育のことにはなしがはいつてゐたのであるが、五四頁の下の方にきて、『自己發見』、『共同感情』、『宗教』、とすゝんできたのをひとまとめに結ぶやうにして、

「父たり母たるもの、親たるものが其の子に、かゝる不動の據り所、かゝる搖ぐことなき中心點を、こよなき贈物として身につけさせやうと欲するならば、親と子は、內的にも外的にも親しく一になれるものとして常にあらはれてあらねばならぬ、靜かなる室內にあるにせよ、自由なる自然のなかにあるにせよ、おのが神にして父なるものと祈りのうちにあつて一なるものとして感じもし識つてもゐねばならぬ。」

と云つてゐます。そして、今もしば〳〵誤解におちいる如く、フレーベルの讀者たちも、かういふやうな言ひ方に對し

て、フレーベルの云はんとするところを、むしろさらへそこねる傾きがあつたものか、こんな風に附け加へてゐます。すなはち、

「なんぴとゝいへども、「そんなことはこどもに分りはしない」などゝ云ふべきではない、(もしそんなことを云ふたらそれはこどもの持つてゐる最高のものを奪ひとることになるのだ)、こどもといふものは、もしひどく荒ませられてしまつてゐるか、自分といふもの親といふものをひどくよそ〳〵しく遠ざけはてゝしまつてゐないかぎりは、親のかくすることが分るのであり、分るやうになるのである、こどもが分るのは概念でゞはなく、自分の内なるものによつてゞある。」

と云つてゐます。フレーベルのものは、こゝのみでなく他の所でも、宗教乃至宗教々育に關するかぎりで云つても、決して單なる形而上學、一派の神學をかまへて其れを述べたてやうといふやうなものではなく――むろん彼の世界觀人生觀したがつて教育觀から來た思想背景、いな、これこそ事の眞實であり、したがつて其の眞實をまことに眞實たらしめてゐる法であるとして、彼のあくまでもとつて動かざるもの、信念があつて、其れがおのづから形而上學的理論の結構となつて彼の論述の骨骼をなしてゐるが――むしろ生と、生の發展とを靜かにしかも敬虔に直觀して、そこから事の眞實、其の眞實を導く法の必然的發展を語るのであるから、おそらく、理論を離れて、こどもならこどもを、己を空しくして直接に觀てをる人には、直ちに、まさに恒に新たなる眞理として迫つてくるものだと云へるかと思ひます。しかし、とは云ひながらも、殊に誤解の多き、ここによれば理解に困難な宗教々育については、このフレーベルの附加が、いつも必要であらうとは思はれます。

## 四

宗教々育に關して、ぬくだけでもぬき〳〵しやうとすれば、數多くの箇處を此の書は含んでゐます。いな含みすぎてゐ

るほど含んでゐます。いなそれどころか、「人間」の「人間らしさ」への教育をしか說かうとしない此の書は一つの見方からすれば、全部が、「人の人たる所以のもの」「神」への教育、宗教々育にほかならないとも云へます。したがつて、宗教々育をフレーベルに聽かうとすれば――そして私達は、巷にかまびすしき種々なる論議を聞くまへに、このフレーベルにまづ聽くべきであり、いなフレーベルにさへ聽けばそれでいゝとさへ云へると思ひますが――どうしても、心しづかに己を空しくして「師」フレーベルのまへに參じながら、この「人間の教育」全卷を通して彼の語らうとするところに、耳傾けねばならぬと思ひます。さうするならば、用語用例などの一派性にとらはるゝことなく――もつともフレーベルその人は敬虔なる基督者的雰圍氣のなかにゐて語り述べてゐたところから、にほはしい宗教性はいつも基督と結びついて現はれてはゐますが――私達はそこから宗教々育への活ける指示をゆたかにあたへらるゝと思ひます。

これで不束なる稿を了へやうと思ひますが、いろ〳〵僭越なことでした。ここに、續稿の最初のあたりにシュライエルマッヘルにきゝながら强調したやうに、教育一般においてもさうであるが殊に宗教々育においては、「言」ではなくて「行」が眼目であり、「行」がなかつたならば他の一切の營爲も全然無意義に終つてしまふことをます〳〵强く感ぜしめられますので、如何に「古典を互ひに讀みあふこゝろで」とは云ひながら、實に不束すぎる續稿でした。筆をおかうとして想ひ出さるるは、生涯も終りに近づいた老翁としてのペスタロッチが、冬の日に、寢るにも床なき人々に、せめて石ころなりと下に敷いて寢ねよと教へて、しかし、もしか「言」において教へた故に、「行」においてもしか指導せざるべからずと、自ら石ころを拾ひ集めてゐたといふ話。そしてまた、ソクラテスが己を殺すアテナイの人々と語りながら、私達は私達のなしうるだけを今なさう、これはげに不束でもあらう、しかし眞理は我々を善きに導くだらうといつた話。（昭和十年八月八日）